

廃棄物最終処分場 浸出水処理装置

毎日の生活や産業活動によって、さまざまなゴミが排出されています。それらのゴミの多くは燃えるものは焼却処分されますが、残った焼却灰は埋め立てられます。再資源化できない不燃物の場合も埋め立て処分されます。こうした埋め立て処分する場所は最終処分場と呼ばれています。最終処分場には雨水などによって溶け出した汚水が地下に浸透しないよう、埋め立て地に防水シートを敷いた管理型があります。しかしそのままでは汚水が溜まってしまいます。そこで最終処分場に溜まった水を浄化して、地下水や近隣の河川が汚れないようにしているのがフジクリーンの「廃棄物最終処分場浸出水処理装置」です。



伊江村産業廃棄物最終処分場管理棟

沖縄の美しい海に浮かぶ伊江島

沖縄本島本部半島から北西約9キロ、紺碧の海上に浮かぶ周囲約22.4キロの伊江島。島のほぼ中央には海拔172メートルの岩山がそびえ、昔から船人たちが航海の目印としてきました。島の産業は漁業、畜産、サトウキビを中心とした農業です。島の周辺には美しいサンゴ礁があり、シモフリタナバタウオやヤシャハゼといった珍しい魚をはじめとしたたくさんの熱帯魚が群れ、海の中にできた自然のドームや洞窟など、人気のスポットを楽しむダイバーが訪れています。

島の周囲はちょうどハーフマラソンの距離と同じため、毎年春には伊江島1周マラソン大会が行われ、全国からたくさんのランナーが参加しています。

豊かな観光資源と農業が中心の伊江村ですが、小さな島だからこその悩みもあります。それはゴミ問題です。中でも不要になった農業用ビニールハウスや建築廃材などは産業廃棄物として処理しなければなりません。これらの廃棄物は、従来は船で沖縄本島まで運んで処理されていましたが、それを村が島内で処理することになりました。最終処

分場は管理型です。しかし、島内で処理をするといっても、万が一にも美しい海が汚れるようなことがあってはいけません。特に最終処分場からの浸出水はきちんと処理する必要がありますがありました。

いつまでも美しい海であるために

伊江村の産業廃棄物最終処分場の浸出水処理施設は生物処理（脱窒）+膜分離+活性炭吸着方式を採用しています。処理能力は1日45m³。雨などで最終処分場に溜まった水を集水ピットへ引き込み、砂などを沈澱させます。そして生物処理で有機物や窒素分を取り除き、精密ろ過膜によって固形分と処理水を分離します。最後に活性炭で臭いや色などを吸着させて放流します。

放流水は最終的に東シナ海へ流れ込むこととなりますが、フジクリーンの産業廃棄物最終処分場浸出水処理装置によって放流水質はBOD10mg/L、COD20mg/L、SS5mg/L、T-N60mg/L、ダイオキシン類10pg-TEQ/Lとなります。これで安心して産業廃棄物を島内で処理ができるようになりました。



伊江村産業廃棄物最終処分場

山村の一般廃棄物処理場でも活躍

フジクリーンは産業廃棄物だけでなく、家庭から排出される一般廃棄物の最終処分場の浸出水処理装置も手掛けています。その一つが長野県安曇郡奈川村（平成17年4月から町村合併により松本市に編入）です。ここは松本市から上高地方面へと向かい、途中から女工哀史で有名な野麦峠へと至る街道沿いに発展した村です。乗鞍岳が望める美しい山村で、夏はキャンプや溪流釣り、冬はスキーなどが楽しめます。ここに一般廃棄物処理場が計画されたのが平成10年、清らかな溪流が浸出水によって汚れないようにフジクリーンの浸出水処理施設が平成14年に設置されました。

従来、浸出水処理装置は少量のものでも全て鉄筋コンクリート製の処理装置を採用していましたが、近年、工期の短縮ができ、コストパフォーマンスに優れたFRP製処理槽の設置基数が伸びています。



旧奈川村一般廃棄物最終処分場

